

經濟論叢

第 166 卷 第 1 号

労働疎外論の一源泉……………田 中 秀 夫 1

国保保険料(税)賦課政策と
被保険者負担(1)……………小 松 秀 和 18

環境政策が国際競争力に及ぼす影響(1)……………羅 星 仁 31

企業におけるグリーン購入についての
コンジョイント分析……………坂 上 雅 治 47

廃棄物広域処理の経済性と財政構造(3)……………八 木 信 一 65

平成12年 7 月

京 都 大 学 経 済 学 会

労働疎外論の源泉

——ジョン・ミラーの経済思想（2）——

田 中 秀 夫

I は じ め に

前稿ではホントが「スコットランド古典経済学における『富国－貧国』論争」と名づけ、分析したコンテキストにおけるホントのミラー解釈をふりかえり、その意義を検討するとともに、ミラーの経済思想は論争の枠組を越えた広範な独自のテーマと議論をもっていることを指摘し、そのなかで、もっとも重要な、商業＝自由論の内容を詳細に検討した。

そもそもポーコックのいう「新マキャヴェッリの政治経済学」（ほぼ重商主義に対応）¹⁾からの古典経済学（スミス）の形成を導いた論争は、「富国－貧国」論争に集約されるわけではない。「富国－貧国」論争はいかに重要な論争であったとしても、当時の商業をめぐる論争の多くのトピック²⁾の一つに過ぎなかった。したがって、ホントは経済学の形成時代の論争の一角を分析したに過ぎないのだから、そこでのミラー解釈が不十分であるのは、むしろ当然であった。

1) マキャヴェッリ時代から古典経済学の形成期までの、いわゆる重商主義経済論については、長い論争と膨大な文献が蓄積されてきているわけであるが、およそ16世紀から18世紀前半までの経済論議を重商主義として括って理解することの無理と欠陥は、とりわけ小林昇教授が盛んに指摘してきた。にもかかわらず広く合意された新しい名称を見つけることできていない。そのような状況に対してポーコックの「新マキャヴェッリの政治経済学」はパラダイム、思想類型として用いるとき、発見的で、示唆に富んだ概念として可能性があるが、その可能性の開拓はこれからの課題であろう。

2) 人口論争、奢侈論争、利子論争、貨幣論争（鋳貨論争や土地銀行論争）、貿易差額論争、公債論争（信用論争）などが主な論争である。

ミラーには分業＝専門化の成果と弊害を問題にした鋭い、アンビヴァレントな経済分析がある。この相反性分析は、スコットランドの啓蒙思想家がほぼ共有した文明の相反性——ポジティブな成果とマイナスの弊害——把握の労働に即した具体的分析に他ならないが、その起源は、直接には、政治と商業の関係、徳と富の両立をめぐるオーガスタン時代のカントリ派＝シヴィック・ヒューマニズムとコート派＝ブルジョワ・イデオロギーの商業論争から発展したものと考えてよさそうである。その論争のなかから二種類の商業（冒険的・奢侈的商業と勤労・節儉的商業）を区別する商業論も生まれた³⁾し、またその論争は、一時期ボリングブルックが主筆をつとめたイングランドのカントリ派の『クラブツマン』の読者であったモンテスキューの商業論にも影響を与えたと見ることができる⁴⁾。

二種類の商業の区別の発生は重要かつ微妙な問題のように思われる。すなわち、オーガスタン時代の経済論争のなかから、商業のもたらす富に多様性を認めるとともに、徳と両立する商業（勤儉の商業）と、両立しない商業（歴史とともに古い商業）を区別して、徳と両立する商業を擁護しようとする議論が成立してくる⁵⁾。土地に基礎を置く富、実業のもたらす富、そして投機や債券（信用）がもたらす富を区別し、安定性とダイナミズムのバランスをどこでとるかが、シリアスな争点となってくる。いささか機械的に分ければ、安定を望

3) この二つの区別は大塚史学が言う「前期的資本」と「産業資本」の区別にある程度パラレルであるが、エートスと行動原理の差異を表示する機能において、この区別のほうが、18世紀に関する限り、より適切のように思われる。

4) モンテスキューの経済思想については、木崎 [1976]、川出 [1996] を参照。

5) スミスによる重商主義と特権的商工業者批判、マルクスによる原始蓄積と産業資本の成立の関連についての議論、ウェーバーによるプロテスタントの倫理と近代資本主義の関係論、あるいは賤民資本主義と市民的資本主義の概念的区別、こういった議論には近代資本主義の成立をめぐる二種類の営利行動の区別とヴァリエーションを読み取る事が可能であり、こうした先駆的業績を踏まえて、大塚史学の前期的資本と産業資本の範疇的区別が提起されたことを、改めて想起しておきたい。市場経済は、自由経済である限り、常に、冒険的・詐欺的利益追求行為と開明された正当な利益追求行為を併存させる可能性がある。明らかに18世紀にはこのような両極にわたる多様な営利行動の存在が知られており、公共の利益との関連で論争が展開されたのである。マンデヴィルが、法に抵触しない限り、市場でのあらゆる行動を容認したとすれば、ハチスンやスミスは勤労に基づく営利行動を望ましいものと考えた。

む保守派は土地を重視する。小ブルジョワや中間層は実業＝インダストリ（勤労）を擁護し、大ブルジョワは投機＝冒険商人（運）を擁護するであろう。また商業が徳と両立するのであれば、貴族が商業に乗り出しても構わないことになるが、しかし貴族の徳（名誉）と商業の徳（正義、慎慮、勤勉）は違うのではないかという議論も生まれる。政治と商業の関係をめぐる18世紀の論争は、ポーコックが鋭く抉り出したように、富、徳、自由の相互関係をめぐる論争であった（Pocock [1975] Ch.12,13）。

この論争のなかから、新しい学問が形成されていく。ミラーが経済論も含む『国制史』を残したのは、ミラーもまたこの論争の諸問題を継承しつつ社会思想を展開したからに他ならない。その結果、ミラーもまた、すでにベリーが注目しているように（Berry [1997] p.143,146）、ファーガスン、スミスを継承した労働疎外論を展開することになる。以下で詳細に検討するのは『英国統治史論』の第4章に展開されたこの問題、分業＝専業化の弊害、すなわち労働疎外論であり、付随的に第5章の知識の分化論についても一瞥する。

ファーガスンとスミスの分業疎外論、あるいは労働疎外論は、これまでもしばしば注目されてきた（West [1964], [1969], [1975], Rosenberg [1965], Hamowy [1968], Lamb [1973], Winch [1978] Ch.4, Brewer [1986], [1989]）し、今ではより広くスコットランド啓蒙の疎外論が取り上げられるようになってきた（Brewer [1987], Berry [1997] pp.144-146,196）。そしてそれは、前述のように、スコットランド啓蒙の文明のアンビヴァレンス分析の一局面であった。マルクスが自らの独特の思弁的な労働疎外論を展開するにあたってヒントを得たのは、ヘーゲルとフォイエルバッハの哲学を別とすれば、ファーガスン＝スミスの分業疎外論からであったことは周知の通りである。近代の労働疎外論の源泉については、ルソーに求められることもあるが、彼らの思想の共通の伝統をさらに遡ると、シヴィック・ヒューマニズムに行き当たる。商業に肯定的なヒュームとスミスはシヴィック・ヒューマニズムを残しつつも

商業ヒューマニズム⁶⁾へと進み、商業により否定的なルソーとファークラスンは商業ヒューマニズムに晒されながらシヴィック・ヒューマニズムを守ろうとしたという差異が認められるが、ミラーは明らかにヒューム=スミス寄りである。

ただし、ヒュームには分業疎外論がないように思われる。ヒュームは分業の事実を十分に認識していたと思われるが、その積極的な側面を指摘するのに忙しかったという印象がある。その理由は、おそらく、第一に政治的理由に求めるべきであろう。すなわち、ヒュームにとっては、ジャコバイト等の旧勢力から、ようやくにして生誕しつつあった自由な商業社会を守ることが最大の課題であった。したがって、かりに分業の弊害に気づいていたとしても、ヒュームはそれをことさら指摘する必要を認めなかったように思われる。ヒュームがファークラスンの初期草稿「洗練論」を賞揚しながらも、それが『市民社会史論』として完成されて1767年に世に出た時に、その刊行に批判的となった理由も、ファークラスンの分業疎外論にあったのではないかと思われる。少なくとも、ヒュームにはファークラスンが商業と近代社会の原理に批判的過ぎる、あるいはルソー寄り過ぎると思われたに違いない。

ホントが指摘したように、ミラーは1771年に始まる講義でも分業疎外論を説いていたが、『英国統治史論』では体系的な興味深い検討がされている。

前稿でもふれたように、『統治史論』の第4巻は、第2章までが本来の統治史論であり、第3章以下は、商工業と自由の関係(第3章)、商工業と知識・学問の関係(第4章)、知識の分割、学問・芸術の分化(第5章)、商工業=富裕と道徳の関係(第6章)、学問の進歩と法・統治との関係(第7章)、芸術の発展と統治の関係(第8章)を論じるエッセイから構成されている。第3、4、6章は経済論と呼ぶ論考であり、第3章は前稿で検討した。本稿では第4、5章を取り上げるが、第6、7章については部分的に取り上げたことがある(田中 [1996], [1997])。

6) 商業ヒューマニズムの概念はなお検討の余地があるが、商業が富をもたらす人間に快適な生活を可能にするだけでなく、同時に正義、几帳面、勤勉、節儉、公平など人間の徳性を育むという認識をもつゆえに商業を擁護する思想としてここでは考えている。

ミラーは、第3章の末尾で、次に商業の発展がもたらす独立と富裕が自由学芸の発展を促進し、知識と学問を国民大衆に普及し、政府の本質に影響を与える意見と感情を導入する傾向をもつ事情の考察を行うと予告していたが、第4章は「商工業の発展は知識と文芸の拡大と普及にどの程度貢献したか」という予告の前半を検討していると言えよう。

II 商工業の発展と学問・技術の分化＝専門化

生活必需品と便宜品を増加させる実践的技術に熟練すれば、それに応じて一般的知識や知的能力も進歩する。実践的技術は、経験観察で発見される原理に基づいて進む。異なる技術から無数の類推と類似を通して、多様な演繹と結論が引き出され、新しい発明発見が生まれる。無尽蔵の類推と類似は一般的知識の源泉であり、発見し整序する能力は人間知性の特権である。このような人間本性を前提とし、ミラーは芸術と学問（科学技術）が富から生まれる事情を説明する。

さて商工業が生み出す膨大な富は不平等に配分され、大財産のもとに生まれる多数の階級は労働を免れるので、彼らのために芸術（elegant and fine arts）が生まれる。壮大さ、新奇さ、美しさによって芸術は趣味を形成し、情念を喜ばせる。

人間が追求するのは、生活のための一般的技術とこのような芸術だけではない。人間の最初の課題は生計の確保であるが、次の課題は獲得物の防衛である。同じ社会に暮らす人間は、相互の交流から、共感と愛情の紐帯で結合されるが、利害と感情の対立から争い、相互に侵害することも多い。そこで権利と義務を自覚ようになる。「権利を強制する規則の体系が漸次導入され、道徳、法、統治の科学がますます開拓され、きわめて異なった思索と意見を生む。」（p.140）宗教問題についての信条と感情から別の学問が生まれる。

物質界の顕著な相貌、自然の変化、土地生産物の性質と用途も研究の対象となる。こうして技芸と科学が発展する間に、次第にそれらは分化し、それぞれ

が諸個人の特殊な専門領域となる。機械的労働の諸部門は別個の階級の職人・労働者の職業となり、労働の種類が複雑になるにつれて階級はさらに分割される。芸術でも分割が進み、絵画、彫刻、音楽が独立し、科学でも同じである。病気や事故が医学を生み、紛争処理の必要から弁護士、法律家の職業が生まれる。神の信仰から牧師職が生まれ、牧師は礼拝の公式の儀礼を司るとともに、道徳の義務を人々に教える役目を授けられる。

こうした芸術と科学の労働の分割は、それぞれの改善に寄与する。専門化によって心身の力はよりよい成果をもたらす。しかし、ミラーは、ファーガスン＝スミスの分業＝疎外論に訴えて言う。職業の分割は、その帰結としての分業と専門化とともに、しばしば個人の人格的性質に反対の影響をもたらす。学問のような自由な職業の場合は、一般的知識を得られないといった弊害はない。しかし、機械的技術では、職人が単一の手の動作しかせず、生産の結果を関知しないほど細分された分業が行われる場合がある。こうした職人は広い知識あるいは知性を得ることはほぼ不可能である。「彼らの仕事は、心が多様な事柄に向かうことを許さない一対象に常に注意する必要があるので、彼らは習慣的に何も考えなくなり (an habitual vacancy of thought)、先に得られる労賃や、身体を休め眠るという有難い褒美から生まれる期待以外からは元気付けられることはない。彼らは機械のように、一定の目方で動き、きわめてすばやくコンパスのような正確さで、そして他のどんな用途にも適さない、一定の運動を行う」(pp.145-146)。

したがって、商工業が高度に発展した国では国民の大多数を成す労働者は、無知となり愚鈍となる傾向が強い。しかし、こうした弊害を取り除く手段もまた商業をもたらす。

III 分業＝専業のもたらす弊害とその対策としての教育

ミラーによれば、上流階級の間における学問と文芸、自由学芸の進歩が「庶民 (common people) を啓蒙」(p.146) し、社会全体に改善を広める。すべて

の人間には上位者を賞賛し模倣する性質がある。高い地位の人間の採用する流行、意見、思考様式は速やかに下層階級に伝わる。ある部門の学問がきわめて有益になったときは常に、それを利益と思う人々は共同して教師を雇うことができる。こうして「教育のための学院や神学校」が生まれ、公共の支援を受けもした。やがて異なる種類の教育制度も市場に登場し、競争で安価となり、「社会の要求にいつそう適応して」(p.147)、貧民も利用できるようになる。こうして商業国では、読み、書き、算盤が下層階級にまで普及している。このように、ミラーによれば、教育の普及は商業の産物なのである。

また書物の出版も知識を普及する手段となる。出版の利益は社会のすべての構成員にある程度は及ぶ。豊かな境遇の人間が読書を楽しむようになると、それは下層の者にも影響を与える。下層階級が読む本は自らの趣味にあったもの、したがって必ずしも教育上最適というわけではないけれども、しかし彼らの想像力を広げるし、またおそらくは「宗教、道徳、統治という重大な国民的トピック」(p.148)について、上流階級の意見の一部を彼らに伝えるであろう。

以上のような原因から発生する教育の成果は、ミラーによれば、古代、近代を問わず、すべての商業国のなかで現在の大ブリテンほど著しいところはない。しかし、にもかかわらずこのような教育が下層階級の自然の境遇の不利をつぐなうに十分かという点、疑わしいとミラーは言う。この点の詳細な検討が「商業と知識・学問」の関連を論じたこの章の最後の要点である。

労働がまださほど分割されていない未開で単純な時代には、社会の知識の蓄積もさほどでないが、しかしその蓄積は異なる階級により平等に伝わったし、下層身分の個人も上流身分と同じく、自らの精神の異なる諸能力を発揮する機会も動機もあった。小さな町に住む職人は同じような境遇にある。彼は異なる多くのことに注意をしなければならない。一つの部門で常に仕事があるわけではないので、彼はいくつもの部門の仕事を行うし、それぞれに必要な多数の道具を備えている。彼はたぶん自分で一部の衣類を作るし、自分や近隣の人の家を建てるし、家族と一緒に畑を耕すであろう。彼は原材料を買い、生産物を売

らねばならないので、商人でもある。商人として彼は人物を観察し、有利な時と場所を考えることになる。彼は自らが市民である都市を守るために軍事訓練をする。したがって、彼の境遇は、より発展した社会の職人の境遇と非常に異なっている。

未開な国民は、自分で何でもするので、身につけられるすべての能力を獲得するし、知識の範囲は広い。「一つの特異な部門において以外に、自分のすべての能力を眠らせ、使用しないことになっている、しかし機械の歯車のように組み合わさって複雑な作業体系を生み出す商業国の職人と異なっており、未開国の住民は、人間の本来の力のすべてをめいめいが保存し、発揮している。しかし彼らは結合した能力では、社会の成員としては、個々人の独立した努力に付け加えるものはほとんどない。」(p.151)

要するに商業の発展の程度が分業の程度を規定し、それが個々人の能力と社会の能力を決定する。そして、個々人が専門的になればなるほど、彼の人間としての本来の能力は一部を除いて退化するが、しかし社会全体の仕事遂行能力は大きくなるという。この明快な認識は注目に値するであろう⁷⁾。個々には他の能力を犠牲にして専門的能力を伸ばす結果、社会全体の仕事遂行能力が大きくなるというこの分析は、個々の犠牲にされる能力を対症的に矯正し維持することを要請するであろうが、その要請が満たされさえすれば、全体の文明の発展を支持できる分析である。ミラーは後に見るように、現状では必ずしも十分な対策が行われていないと見ているが、対策は可能と考えており、したがって、法学の枠組のなかにシヴィック・ヒューマニズム（自立としての自由、政治的能動性の重視、専制・腐敗批判）の精神を基調として受容しているミラーは、商業発展を支持する立場に立つことができたと思われる。

イングランドとヨーロッパの他の商業国では、製造業が発展すればするほど、庶民は一般的な話題に関心をもちなくなり、会話の能力も細々したことを遂行する能力も乏しくなると信じられている。したがって北部の隣人のほうが狡賢

7) この認識はローゼンバークによれば、ほぼスミスの認識と言ってよい。Rosenberg [1965] p.139.

いと一般に言われている。スコットランドでは商工業はイングランドほど進んでいないので、勤労に励む習慣も同じほどではないし、狭い商業的職業にイングランドほど呑み込まれてもいない。

同じ国でも、職業が異なれば、分業の程度によって、差異がある。農業は手工業ほどの労働の細分ができない。農業労働者は、耕し、種を蒔き、刈り取りをする。異なる目的のために大地を耕し、様々な作物を作る。きわめて異なった道具を使い、修繕し、造りもする。季節の移り変わりや気候の変化に応じて労働しなければならない。家畜の飼育もするし、牧畜業者、穀物商人ともなり、馬の手綱もとる。職人と農民はこんなにも違う。「何という広い知識を彼はもたなければならないか。ピンの先端を尖らしたり、ピンの頭を叩いたりすることが労働のすべてである職人と比較して、彼は何という様々な才能を発揮しなければならないことか。この二人の教育は何と違うことか。」(p.154)

都市に暮らすピン職人は農民より多くの流行の社会改良の所産を享受する。彼は農民と比べて、よい服を着るし、本から得る知識も多く、話し方も滑らかで、顔つきも身のこなしも荒々しくない。女性にも好ましく思われる。しかし、実業では農民の好敵手ではまったくない。知性でも鋭敏さでも遥かに劣り、長上との会話はずっと下手である。

ミラーは以上の考察の結論として、このような状況は好ましいとは言えないという見解を提出する。国民全体としては「富と知性の改善はすこぶるよくバランス」(p.155)しており、富は知識をもたらすが、しかし個人の間ではそうではなく、下層階級では富と知識は完全に逆転する。したがって一般民衆が重要さを失い、上流階級のカモとなり、今の地位を失う心配がないだろうか、とミラーは言う。実際に下層階級が上流階級によって搾取され、カモにされる場合には、ミラーはそのような社会を否定するであろう。そのような観点からミラーは中世ヨーロッパを鋭く批判する。

暗黒時代には、ヨーロッパの大部分で国民が知識を持つ階級と無知な階級に分かれていた。すべての学問を独占し、利害がらみで行動する多数の聖職者が

一階級を成し、戦争と略奪に従事した軍人と農奴に転落した農民——共に無知と迷信に陥っていた——からなる俗人階級がもう一階級を成した。人々に世俗の利益を考えることを一切断念せよと教えた牧師は、能力の優越を利用し、底深い欺瞞と詐欺の体系に団結して、大部分の財産を断念し、教会の専制を生み出す巨大な侵害に服従するように純朴な羊の群れを説き伏せた。

このようなカトリック教会批判は、ホッブズからスミスまでの批判を継承するものとみなしてよいであろう。

このような中世の事態と比べると、商業社会では上流階級が下層階級を虐げるために自らの優越を悪用する心配はない、とミラーは言う。その理由として「一般民衆の精神を耕作し、全般的な繁栄のために犠牲にしたと言いうる知識を彼らに取り戻させる支援をすることは、明らかに上流階級の利益である」(p.158)とミラーは言明している。ミラーはそれ以上、詳しく理由を述べておらず、この考察はいささか不足しているように思われるが、ミラーはこの点を自明としているのであろう。そしてミラーはすぐに次のように下層階級の徳性論を続けている。

すなわち、徳を行う動機をもたらし、犯罪を避けるためには、ある程度の知識、行為の帰結の善し悪しの認識が不可欠である。下層階級が家内のことがらにおいて真面目かつ勤勉で、正直かつ忠実で、愛情深く、良心的であること、また友好的に振る舞い、暴動や無秩序を嫌うということは社会にとってきわめて重要である。観察と考察の習慣をもたなければ、様々な義務の遂行など不可能である。人間として、また市民として、下層階級を役に立つようにするには、真の幸福を促進することを正しく評価し、彼らをおとしいれる虚偽の見せかけを見破り、野心家が広めようとしている宗教、道徳、統治に関する誤謬から守るような状態になればならない。不平等な運命が課している束縛に耐えさせ服従させるためには、労働者の無知が利益なのだという政治家がしばしば持っている教義は、馬鹿げているし、人間的な感情に背いている。人間として、市民として、下層階級を有益にすることをミラーが展望していることは重要であ

る。このような言葉は、スミスにも見られないように思われるからである。

こうしてミラーは、商業社会は下層階級の精神の改善に不都合であるから、学校などの教育施設を設けて、下層階級、「市民のうち最も有益であるが卑しい階級」に、知識を伝えること、彼らの職業に由来する自然の傾向を相殺することが、公共の重要な課題であると言う。しかし、ミラーは決して楽天的というわけではない。ヨーロッパの学校やコレッジは上流階級の利益だけを考えた。しかもこの目的にとっても良い制度だったとは言えない。もっとも、地位と財産のある人々は、公共の支援など求めないし、放任されても、たいてい、より良い知識を身につけるであろう。他方、下層身分の教育のリベラルな計画を実施すれば、貧民の扶助、病人と虚弱な人の救済、罪人の矯正にとって、「現代の人間愛と公共精神」(p.161)に発する努力に加えて、価値ある追加となるだろう。この種の大規模な制度としては、スコットランドの教区学校がこれまでのところ唯一存在するものである。ミラーによれば、これは一般教育の目的に必ずしも適切ではないが、しかしその利益は顕著であり、広く認められている。

以上が教育制度論であって、この議論はスミスと比べても簡単なものである。スミスには学校だけでなく、娯楽制度の必要論もあれば、民兵論もあって、スミスはミラーに比べて、文明社会における労働階級の愚鈍化の対症療法を、より詳細かつ綿密に検討している⁸⁾。

商業社会における分業＝専門化の悪影響を重視する、ファーガスン＝スミスを継承する、ミラーの分業疎外論は、先行するどの思想家の議論にもまして深く広いし、啓発的である。とはいえ、ミラーは、対策としては、スコットランドの教区学校のような制度をさらに改善して、広く公共の配慮で普及することを求めるにとどまっており、ケイムズ (Kames [1781]) やフォーダイス (Fordyce [1745]) のように、あるいはルソーのように、詳細な教育論を展開したわけではない。

8) Smith [1976] II, pp.781-788, 邦訳 [1978] 第Ⅲ巻, 142-54ページ。

IV 知識の分割、学問・芸術の分化・専門化

以上の分業弊害論の次に、ミラーは、商業国において自由な教育から生じる政治的変化の考察のためには、知識の主要部門を検討し、社会の意見、性格、習俗・作法に与える影響を考察すべきであるとして、このような見地から、詳細に学問・芸術そのものの——分業＝労働ではなくて——分化＝専門化を検討している。それが第5章である。

知識の対象は①思考や知性の作用によるもの、②生命のない物質の属性と作用に関係するものに区分できる。人間はまず最初に身の周りの物体を眺め、次に自らの思考能力の働きに注意を向ける。したがって自然学＝物理学が哲学の第一部門となる。それには古代の賢者が傾倒したが、文芸復興以後に相当な進歩があった。自然学は天体の運行、地球の変化に拡張され、関心をかきたてるすべての対象、風、潮流、雷鳴と雷光、空気、水、火、電気、磁気の性質及んでいる。

たんなる好奇心だけで、人類は世界＝宇宙の偉大な劇場の変化と相貌を調べることになったが、実際の生活の技術に応用するために、いっそう詳細に物体を調べた。病気や怪我の治療は植物や鉱物の医学的効能を注意深く調べさせた。手工業の進歩は機械力の発見をもたらし、機械の製作を可能にした。錬金術や長寿法を見つけようとする無知な時代の努力は、熱と混合の驚嘆すべき結果の発見となり、近代の化学を生んだ。

こうして解明される物体が多数となり複雑になるにつれて、それらを秩序づけ分類する必要から自然史が生まれた。また自然の一般的法則の研究と実践的技術から、物体の数、大きさ、形状を測定・比較する必要が生まれ、こうして幾何学と代数学が成立した。

以上が物体に関する学問の主要部分であるが、人間の精神的能力の作用に基礎をおく学問は三大部門に分かれ、それぞれ下位部門に分かれる。

社会で一緒に暮らす人間の行動の善悪、すなわち徳と悪徳はすぐに私たちの

注意をひき、感情の関心となる。他方、他人も同じような判断をすることに我々も気づく。こうして私たちは相互の視線を意識して自らの行為を考察し評価するようになる。このような思索は、「重要な社会についての見方」から生じる実践的な規則や観察とともに、倫理学、すなわち道徳の学問を形成する。

この世に起こる異常な出来事や自然の物体に起こる変転を説明するために、人間は自らが生み出した運動や変化の経験から類推して、人間に類似した、しかしより優れた知性と力をもつ優越した力の作用に訴えた。こうした存在があるという信念、それと人間との特殊な関係の考察が、人間に対して善または悪をなすそれらの能力という理解とともに、宗教学を生み出した。それは宗教的見解と義務を含む。

それ以外に、優雅な楽しみを増すことによって人間社会を飾り立てる他の精神の働きがある。人為であれ、自然であれ、美しいもの、崇高なものから趣味の喜びと美術が生み出される。こうした美術では、実践的規則が、その基礎となっている原理の研究と、異なる源泉から生まれる快楽の学問的演繹を生み出すのであって、技術と学問が相互を伴っている。感覚から引き出される快楽は、理解されることによって高められる。

人間が発揮する能力は、きわめて興味深く、多数あり、多様で、感知できない境界で分かれており、それぞれの原因に帰着できない結果を生み出すので、人間の思考の原理の多様な働きを数え挙げ、分析し、相互比較し、それぞれの関係を明らかにすることが重要となった。そしてこのような考察は、ほとんど成功しなかったが、人間より優れた知性と、劣った知性に適用されてきた。これが形而上学である。形而上学は道徳、宗教、美術の補助学とみなしうるが、自然学における自然史に対応する位置をしめられると思われる。

V 自然科学の発展と自由

以上のような学問の自然科学と人文科学への分化論を述べたあと、ミラーは自然科学の効用と学問の不均衡発展とでも呼べるような現象について論じている。

自然哲学とその関連学は、統治と関連する我々の思想を広げ、改善する直接の影響はない。しかし、「自然の知識の発展は、そのすべての部門において、普通の生活技術の改善にはきわめて有益であり、したがって一国民の大集団の富裕と独立を促進することによって、それに比例して、自由の感情を彼らにもたせることに貢献するに違いない。下層階級に自らの労働によって生活することを容易にできるようにさせることは、民主政体の最上の基礎となる。」(pp.168-169)。自然の知識の発展→生活技術の改善→富裕と独立の促進→自由の感情・民主政体というこの推論は、ヒューム=スミスの思想によって養われたものであることは、明らかである。

次の問題は、なぜ産業技術はブリテンで最も発展し、自然哲学はフランスで最も発展したかである。ミラーはこう論じる。実践的技術はその基礎となる原理の発見をもたらし、異なる種類の労働を容易にしたり、自然の秘密の働きを洞察するうえで、有益な発見を生み出す。したがって、「上位階級の職人、あるいは自由な教育の利益を享受した専門家が生み出す技術の改善は、ブリテンで最も奨励されている」(p.169)と想定できる。というのは、過去1世紀、ブリテンで製造業はヨーロッパのどこよりも発展したが、それは利益をもたらすすべての発明に最大の市場が与えられたからである。この市場に供給したのが土地の人間であろうと、外国人であろうと、重要でない、とミラーが付言していることは、スミスの見解と対蹠的で、見逃せない。

逆に、余暇と興味の産物である改善は、思索的哲学者に職を与えるが、他のヨーロッパ諸国でいっそう発展した。およそ1世紀前の天才ニュートンはこの島で真の哲学の急速な発展をもたらした。他方、フランスでは、デカルトの大きな名声が不運なバイアスとなり、フランス人に間違った妄想的な学説を採用させた。このような遅滞にもかかわらず、自然哲学は終にフランスと若干のヨーロッパの地域でブリテン以上に発展した。その理由は「こうした諸国の専制政府によって住民がある程度、宗教、道徳、政治という、より一般的に興味の対象となる探究を遮られ、趣味の問題や抽象的思索か、物体の本性と働きに

依存する問題に、思索を限定されたからである。」(pp.170-171) こうした限定された領域で努力が発揮され、数学、物理学、化学、自然史に傑出することになった。

最後の問題は、哲学という抽象的な知から自然の知識の追究という経験的な知への関心の移行である。文献史に注目すれば、哲学がある程度進歩したあと、多くの国では、自然の知識の追究が優勢となることが分かる。その理由をミラーは次のように述べる。すなわち、人間精神の能力と働きの探究では、すでに得られた知識の蓄積に新しい知識を付け加えたり、新見解を示したりすることがやがて不可能となるであろう。こうした複雑な主題においては、すでに知られていることがらを明確に認識したり、先輩哲学者の見解を分かるように説明するためには、特殊な鋭さと識別力さえ必要である。しかし、外的自然を研究する多くの分野では、強い好奇心と専心する忍耐力があれば、あとは普通の理解力があればよい。新しい実験を考案するほどの人なら垣塙の内実を辛抱強く調べることができる。植物の各部分を観察し分類できる人、あるいは動物の生理について新しい正確な研究を行う人は、研究の結果を忠実に報告し、明瞭に説明できる。こうした人は自然に関する私たちの知識を増やし、ある程度名声も得ることができる。したがって多くの人の能力にかなない、適切な習熟と知識があれば労働がもっとも必要とされる学問分野が、最も普遍的に追究され、最も人気があることに、驚くことはない。

自然の知識の分割についてはこれでよいとして、ミラーは次に、「今世紀に生じた民衆の意見の潮流の変化を描写するためには、精神の能力と働きに直接関連する学問を個々に検討し、道徳、宗教、あるいは趣味の問題における思索と議論の進歩が、どの程度、統治との関連での民衆の感情に影響したかを考察する」(p.173) 必要があると述べて、この短い章を終え、第6章の商業と道徳の関係論へと進んでいる。続く第7章は学問と法・統治との関係を表題にしているが、学問の進歩は商業の進歩を基礎としているので、広義の商業論(経済論)とみなして差し支えないとすれば、最終章も同じように言えるであろう。

ミラーの経済思想は、自由、学問、道徳、法と統治、芸術との関連で展開されている点に重要な特徴がある。残された部分の考察は続稿に委ねることにする。

参 照 文 献

- Berry, C. [1997] *Social Theory of the Scottish Enlightenment*, Edinburgh U. P.
- Brewer, J. D. [1986] "Adam Ferguson and the Theme of Exploitation," *British Journal of Sociology*, 37.
- [1987] "The Scottish Enlightenment" in *Modern Theories of Exploitation*, ed. by A. Reeve, London, Sage.
- [1989] "Conjectural History, Sociology and Social Change in Eighteenth Century Scotland: Adam Ferguson and the Division of Labour" in *The Making of Scotland*, eds. by D. McCrone et al., Edinburgh U. P.
- Fordyce, D. [1745] *Dialogues concerning Education*.
- Hamowy, R. [1968] "Adam Smith, Adam Ferguson, and the Division of Labour," *Economica*, Vol. 35, No. 139.
- Hont, I. [1983] "The 'Rich Country and Poor Country' debate in Scottish Classical Political Economy" in *Wealth and Virtue*, Cambridge U. P. (水田・杉山忠平監訳『富と徳』未来社, 1990年)。
- Hume, D. [1752] *Political Discourses*. (田中敏弘訳『ヒューム政治経済論集』御茶の水書房, 1983年)。
- Kames, Henry Home, Lord [1781] *Loose Hints upon Education*.
- Lamb, R. [1973] "Adam Smith's Concept of Alienation," *Oxford Economic Papers*, Vol. 25, No. 2.
- Lehmann, W. C. [1960] *John Millar of Glasgow*, Cambridge U. P.
- Lieberman, D. [1983] "The Legal Needs of a Commercial Society: the Jurisprudence of Lord Kames" in *Wealth and Virtue*. (水田・杉山監訳, 前掲書)。
- Millar, J. [1771] *Observations concerning the Distinction of Ranks in Society*, London.
- [1771-1772] Lectures on Government, [MS. 99, Mitchell Library]
- [1787-1788] Lectures on Government, [MS. Gen. 289-291 GUL]
- [1803] *An Historical View of the English Government*, Vol. 4, London.
- [1806] *The Origins of the Distinction of Ranks*, 4th ed. with An Account of the Life and Writings of the Author by John Craig, Edinburgh and London.
- Pocock, J. G. A. [1975] *The Machiavellian Moment*, Princeton U. P.
- Rosenberg, N. [1965] "Adam Smith and the Division of Labour, Two Views or

One," *Economica*, Vol. 32, No. 126.

Smith, A. [1976] *The Wealth of Nations*. (大河内一男監訳『国富論Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ』中公文庫, 1978年)。

West, E. G. [1964] "Adam Smith's Two Views of the Division of Labour," *Economica*, Vol. 31, No. 121.

—— [1969] "The Political Economy of Alienation: Karl Marx and Adam Smith," *Oxford Economic Papers*, Vol. 21, No. 1.

—— [1975] "Adam Smith and Alienation: A Rejoinder," *Oxford Economic Papers*, Vol. 27, No. 2.

Winch, D. [1978] *Adam Smith's Politics*, Cambridge U.P. (永井・近藤訳『アダム・スミスの政治学』ミネルヴァ書房, 1990年)。

川出良枝 [1996] 『貴族の徳、商業の精神——モンテスキューと専制批判の系譜』東京大学出版会。

木崎喜代治 [1976] 『フランス政治経済学の生成』未来社。

田中秀夫 [1991] 『スコットランド啓蒙思想史研究——文明社会と国制』名古屋大学出版会。

—— [1996] 『文明社会と公共精神』昭和堂。

—— [1997] 『権威の原理と功利の原理——ヒューム・スミス・ミラー——』『思想』879号。

—— [1999] 『啓蒙と改革——ジョン・ミラー研究』名古屋大学出版会。